

編集後記

新年、あけましておめでとうございます。1999年の干支は「兎」ですが、更なる飛躍の年としたいものです。20世紀も残りわずかとなってしまいました。今世紀の科学の進歩はめざましいものがあります。しかし、地球・宇宙規模のグローバルな開発・進歩の反面、環境破壊や地域レベルでの争い・貧困は相変わらずで、その格差はむしろ広がる一方のようにも思えます。人間の「おごり」の結果であるとはいえ、果たして「人類」は本当に進化しているのでしょうか？ 来世紀には「地球レベルでの study」の結果が明確化することでしょう。新年早々にもかかわらずいささか愚痴っぽくなってしまいました。

本学会誌も第32巻という、人間でいえば「働き盛り」の年齢に達しました。内容的にも世界をリードするレベルになってきていると確信しています。毎回査読にあたって、未だに多くみられる注意・修正点を以下にまとめてみました。参考にして頂ければ幸いです。「誤字脱字」や「てにをは」の誤りは初歩的。「題名」：和英の統一・整合性を、的確・簡潔に「Key words」：operation-> gastrectomy と具体的に「はじめに」：論文を書くに至った動機や先人の代表的論文の引用を、論文は過去形で記述する「方法」：randomized controlled study が望ましいが、historical controlled study の場合でも、対象の定義・臨床的意義・診断基準を明確にし、背景因子は詳細に記載し、統計的処理法は明確に「結果」：結果は結果だけとし、結果にないことは「考察」に述べない「考察」に図表は不要「結語」は「要旨」に含め不要「本邦第1例目」「極めてまれ」などの記述には十分注意を。倫理面・ヘルシンキ宣言にも留意する。「責任病理医」を著者に、等々。

「はじめに結論ありき」と思われる内容や、独断的で科学的論文としての形態をとっていないものも多く、著者や指導者の裁量にかかわっているといえそうです。査読者としても、偏見や独断に陥らず、表面的な評価にならないよう十分に注意してゆきたいと考えています。また、本学会誌は「真摯で自由な討論の場」を提供することにあるとも考えています。従って論文の最終評価をするのは、読者自身にこそあるものと考えます。本年も気を引き締めて業務を全う致したいと思います。宜しく願い申し上げます。

(今泉俊秀)